Copyright (c) 2010-2020 Zenninji Association All Right Reserved

ぜんにんじじほう

善仁寺報

THE ZENNINJI NEWS

発行者　青山 満　　発行所　東京都文京区小石川4丁目13番19号
TEL　03(3811)4803　　FAX　03(3811)3295
E-mail　kbkpm386@ybb.ne.jp

2015年5月10日発行

Vol.21

弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ぼこり（註1）とて、往生かなうべからずということ。この条、本願をうたがう、善悪の宿業（註2）をこころえざるなり。よきこころのおこるも、宿善（註3）のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のはからうゆえなり。故聖人のおおせには、「卯毛羊毛（註4）のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずということなしとしるべし」とそうらいき。また、あるとき「唯円房はわがいうことをば信ずるか」と、おおせのそうらいしあいだ、「さんぞうろう（註5）」と、もうしそうらいしかば、「さらば、いわんことたがうまじきか」と、かさねておおせのそうらいしあいだ、つつしんで領状（註6）もうしてそうらいしかば、「たとえば、ひとを千人ころしてんや（註7）、しからば往生は一定すべし」と、おおせそうらいしとき、「おおせにてはそうらえども、一人もこの身の器量にては、（註8）ころしつべしとも、おぼえずそうろう」と、もうしてそうらいしかば、「さてはいかに親鸞がいうことをたがうまじきとはいうぞ」と。「これにてしるべし。なにごともこころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども、一人にてもかないぬべき業縁（註9）なきに

今回なぜ十三章をとりあげたかと申しますと、わたし自身、歎異抄と出あった最初の言葉が、傍線をひきました文、

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」でありました。これは、大岡昇平（1909~1988）の著作の『俘虜記』に出て来たきました。主人公の男（日本兵）がライフルでアメリカ人の青年兵士の頭に狙いをさだめて、確実に殺すことができる状況において男が故郷で昔、僧侶（だったと記憶しています）から教えられた「歎異抄」の右の言葉が突然と思い出されます。主人公はライフルの引き金をひくことを選ばず、手榴弾で自害する道を選びます。（マラリアに罹患し、行軍を一人別にしていました）この文を意訳すれば、人間とは、縁があればどのような行いもする。ということでしょう。まさに、この章のはじめには千人の人間を殺せるか否かと親鸞と唯円の問答から始まります。

ここで言い表されていることは「悪人正機」という悪人こそ弥陀の本願によって救われるという「歎異抄」全体を通底しているテーマが示されています。

そして、その教えにふれたとき、「本願ぼこり」という心の問題が現れることをご注意されておられます。

曽我量深師（1875~1971）はこの章について「人生は心にあるのではなく宿業にある。」「衆生（私たちひとりひとり）に宿業の自覚の成り立つことをおたすけと言う」と述べておられます。

「俘虜記」の主人公の引き金をひくことを止めさせたのは善悪という倫理基準ではないでしょう。

多くの仲間を殺され、ここで殺さなくてはこの若いアメリカ兵は仲間を殺すかもしれない、という立場でみれば引き金をひくことが「善」と言えるかもしれません。

「また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」（殺そうと思わなくても幾多の人間を殺すこともある）です。

今年、戦後七十年をむかえ、世界に目を向ければ今なお戦火の止むことがありません。

改めて「歎異抄」十三章の言葉を聞いていくことが願われます。

善仁寺 同朋会便り

● 共同合葬墓のお参り

善仁寺には共同合葬墓が2カ所あります。ひとつは本堂に向かって左側にある地蔵菩薩像の下側が収骨できるようになっています。もうひとつは墓地敷地北側角（共同印刷側）に左写真のような建物

↑第二共同合葬墓。地下は全て散骨場となり地上屋内はご本尊と収骨棚（骨壺のまま収納）が設置されています。

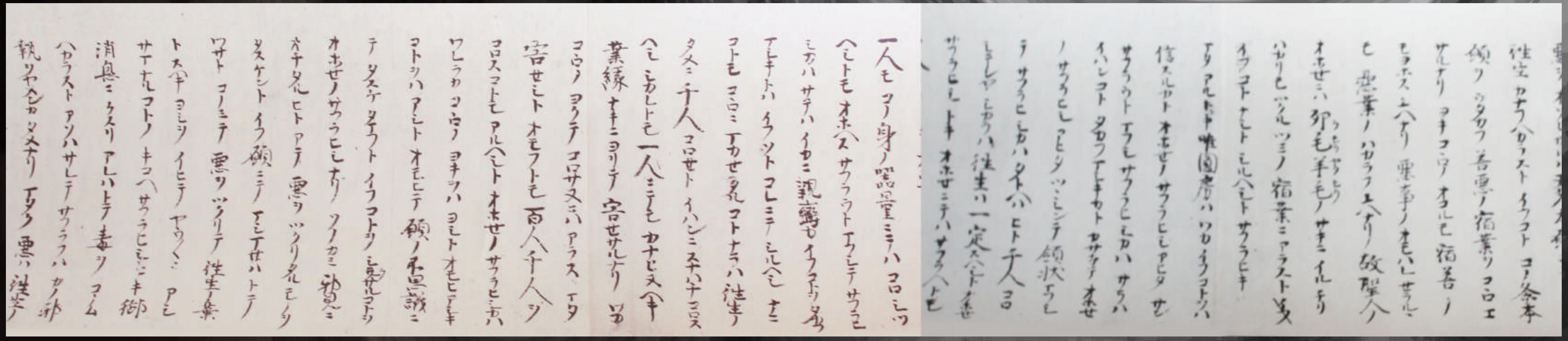
があります。善仁寺同朋会の大島会長は以前より、共同墓へのお参りの方がほとんど無く、素通りする方が多い現状は見直されるべきことではないかと感じておられました。ご本尊が安置される本堂も見向きもせず、我が家のお墓へ一直線の方も多く見受けられます。阿弥陀に手を合わせ、お念仏し先祖を憶念する。その先祖はどこまでも広く深い歴史をもっていると思うと、あちらの家のご先祖、ウチの家のご先祖の区別も消えて一味平等の世界があるのかもしれません。

お墓参りの際にはご本堂（ご本尊）、共同合葬墓へのお手合わせも心掛けていただきますよう、お願いします。

↑今年の春季彼岸の際に善仁寺同朋会にて無縁墓（公告中）の仏前花とお線香をお供えし、お参りいたしました。
（※現在公告されている墓地は本年7月期限となります。）

よりて、害せざるなり。わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」と、おおせのそうらいしは、われらが、こころのよきをばよしとおもい、あしきことをばあしとおもいて、願の不思議にてたすけたまうということをしらざることを、おおせのそうらいしなり。(註10)そのかみ(註11)邪見（じゃけん）におちたるひとあって、悪をつくりたるものを、たすけんという願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、(註12)往生（おうじょう）の業とすべきよしをいいて、(註13)ようように、あしざまなることのきこえそうらいしとき、(註14)御消息（ごしょうそく）に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」と、あそばされてそうろうは かの(註15)邪執（じゃしゅう）をやめんがためなり。まったく、悪は往生のさわりたるべしとにはあらず。(註16)「持戒持律（じかいじりつ）にてのみ本願（ほんがん）を信ずべくは、われらいかでか生死（しょうじ）をはなるべきや」と。かかるあさましき身も、本願にあいたてまつりてこそ、(註17)げにほこられそうらえ。さればとて、身にそなえざらん悪業（あくごう）は、(註18)よもつくられそうらわじものを。また、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、(註19)ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠（でんぱく）をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなり」と。(註20)「さるべき業縁（ごうえん）のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人はおおせそうらいしに、当時は(註21)後世者（ごせしゃ）ぶりして、よからんものばかり念仏もうすべきように、あるいは(註22)道場にはりぶみをして、(註23)なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからず、なんどということ、ひとえに(註24)賢善精進（けんぜんしょうじん）の相をほかにしめして、うちには虚仮（こけ）をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよおすゆえなり。さればよきことも、あしきことも、業報（ごうほう）にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ。(註25)『唯心抄（ゆいしんしょう）』にも、「弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業（ざいごう）の身なれば、すくわれがたしとおもうべき」とそうろうぞかし。本願にほこるこころのあらんにつけてこそ、他力（たりき）をたのむ信心も決定（けつじょう）しぬべきことにてそうらえ。おおよそ、悪業煩悩（あくごうぼんのう）を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもいもなくてよかるべきに、煩悩を断じなば、すなわち仏になり、仏のためには、(註26)五劫思惟（ごこうしゆい）の願、その詮（せん）なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるるひとびとも、煩悩不浄（ぼんのうふじょう）、具足（ぐそく）せられてこそそうろう(註27)げなれ。それは願にほこらるるにあらずや。いかなる悪を、本願ぼこりという、いかなる悪か、ほこらぬにてそうろうべきぞや。かえりて、(註28)こころおさなきことか。

（歎異抄十三章／真宗聖典六三三～六三五頁）



歎異抄·蓮如上人筆写本 →
（西本願寺蔵）

この他、永正本（大谷大学蔵）や恵空写本（大谷大学蔵）など複数の写本が現存する。原本は発見されていない。 正確な成立月日は不明。 親鸞没後20～30年に成立されたと見られている。
作者については、唯円説·覚如説·如信説または複数人説などある。

ようやく歎異抄（たんにしょう）を取り上げさせていただきました。歎異抄は真宗の聖典のなかで、最も親しまれてきた文章であるといえるかもしれません。

「かな」で書かれており、その読みやすさから、蓮如上人（れんにょしょうにん）の御文（おふみ）とならびまず最初に触れる真宗の教えの書となってきました。

【※註】

（1） 本願ぼこり
本願につけ上がること。あまえること。（阿弥陀の本願は悪人こそ救うという教えを曲解し、悪行をかさねること）

（2） 宿業
過去になした行い。業。

（3） 宿善
過去になした善い行い。

（4） 卯毛羊毛
うさぎの毛や羊の毛。（非常に小さくて軽いという意として）

（5） さんぞうろう
わかりました。そのとおりに。

（6） 領状
承知·承諾すること。

（7） ころしてんや
殺してくれないか。

（8） ころしつべし
殺せそうに思えません。

（9） 業縁
ある行為が実現するための様々な事情·条件。

（10） そのかみ
その昔。かつて。

（11） 邪見
よこしまな考え。まちがった見解。

（12） 往生の業
浄土にうまれるための行為。

（13） ようように
さまざまに。

（14） 御消息
親鸞聖人のお手紙。

（15） 邪執
まちがった考えや不正な考えに固執する。

（16） 持戒持律
戒律（仏教徒が生活上まもるべきとされる規則）を保ち守ること。

（17） げに
本当にほこらしく。

（18） よも
よもや。まさか。

（19） しし
けもの。

（20） さるべき
そうなるべき。そうなる筈の。

（21） 後世者ぶりして
まじめに往生を願っているひとのようにふるまって。

（22） 道場
聞法する場。またはその建物。

（23） なむなむ
これこれのこと。

（24） 賢善精進の相
立派な仏弟子の様な様子。

（25） 唯信抄
聖覚著（法然上人門下）。親鸞はこの書の注釈「唯信抄文意」を書いている。

（26） 五劫思惟の願
五劫（極めて長い間）思いをめぐらしたてられた阿弥陀の誓願。

（27） げなれ
様子である。見受けられる。

（28） こころおさなき
考えが浅はかである。